

ヒトパピローマウイルス感染症の予防接種を受けるにあたっての説明

周南市

○保護者の方へ：必ずお読みください

◆ヒトパピローマウイルス（HPV）感染症とは

ヒトパピローマウイルス(HPV)は、皮膚や粘膜に感染するウイルスで、100以上の種類に分類されています。これらのうち、主に粘膜に感染する種類は、性行為を介して生じる表皮の微小なキズから、生殖器粘膜に侵入して感染するため、性交経験がある女性であれば誰でも感染する可能性があります。

HPVのうち、特に発がん性が高いタイプ(16型、18型)の感染が問題となります。近年、20～40歳代の子宮頸がんは増加傾向にあり、子宮頸がんの約70%はHPV16、18型感染が原因とされています。

◆ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンについて

ヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチンは、接種することによって体内に抗体をつくり、HPVの感染を防ぎます。現在、国内で販売されているワクチンは、子宮頸がん患者から最も多く検出される16型、18型の感染を予防する2価ワクチン(サーバリックス®)と尖圭コンジローマや再発性呼吸器乳頭腫の原因にもなる6型・11型も加えられた4価ワクチン(ガーダシル®)があります。このワクチンは、既に感染しているHPVを排除することや発生した前がん病変や子宮頸がんを治すことはできないため、初回性交渉前に接種することが推奨されています。

HPVワクチンは、肩の近くの腕の筋肉に注射をします。1～2回の接種では十分な抗体ができないため、半年の間に3回接種することが必要です。使用するワクチンは、接種医と相談のうえ、「2価ワクチン」もしくは「4価ワクチン」のいずれかを選択してください。

◆ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンの定期接種の対応について

ワクチンとの因果関係を否定できない持続的な疼痛が、HPVワクチン接種後に特異的に見られたことから、平成25年6月14日に、この副反応の発生頻度等がより明らかになり、国民に適切な情報提供ができるまでの間、定期接種を積極的に勧奨すべきではないとされ、厚生労働省による積極的な接種勧奨の差し控えが継続している状態です。

ヒトパピローマウイルス感染症ワクチンの定期接種を受けることは可能ですが、ヒトパピローマウイルス感染予防と副反応等の状況を検討した上でご判断ください。

【接種回数とスケジュール】



※2価ワクチン(サーバリックス®)を接種する場合は、1回目以降、1か月後と6か月後に接種する。ただし、当該方法をとることができない場合は、2回目の接種は1回目の接種から1か月以上の間隔をおいて2回接種した後、1回目の接種から5か月以上、かつ2回目の接種から2か月半以上の間隔をおいて1回接種することができる。

※4価ワクチン(ガーダシル®)を接種する場合は、1回目以降、2か月後と6か月後に接種する。2回目及び3回目の接種が2か月後及び6か月後にできない場合は、2回目接種は1回目接種から少なくとも1か月以上、3回目接種は2回目接種から少なくとも3か月以上の間隔を置いて接種することができる。また、1年以内に3回の接種をすることが望ましい。

【注】1回目に接種したワクチンと同じワクチンを2回目、3回目も接種します。(接種開始後のワクチンタイプの変更はできません)

【主な副反応】

主な副反応は、軽度の発熱、倦怠感や接種部位の痛み、発赤、腫脹(はれ)です。また、ワクチン接種後に注射の際の痛みや刺激等によって失神や気分が悪くなったりすることがあります。失神による転倒を避けるため、接種後30分程度は体を預けることのできる背もたれのあるソファに座るなどして様子を見るようにしてください。

稀に報告される重い副反応としては、アナフィラキシー様症状(ショック症状、じんましん、呼吸困難など)、ギラン・バレー症候群、血小板減少性紫斑病(紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等)、急性散在性脳脊髄炎(ADEM)等が報告されています。

※ADEM

一般にウイルス感染後、あるいは、極めてまれにですが、ワクチン接種後に発症すると考えられる脳神経系の病気です。ワクチン接種後の場合は、通常数日から数週間程度で、発熱、頭痛、けいれん、運動障害などの症状が出ます。ステロイド剤などの治療により、多くの患者さんは正常に回復しますが、運動障害や脳波異常などの神経系の後遺症が10%程度あるといわれています。

裏面に続く

◆接種に当たっての注意事項

予防接種の実施においては、体調のよい日に行なうことが原則です。お子様の健康状態が良好でない場合には、かかりつけ医に相談の上、接種するか否かを決めてください。

また、お子様が以下の状態の場合には予防接種を受けることができません。

1. 明らかに発熱(通常37.5℃以上をいいます)がある場合
2. 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合
3. 受けるべき予防接種の接種液の成分によってアナフィラキシーをおこしたことがある場合
4. 明らかに免疫機能に異常のある疾患を有する場合及び免疫抑制をきたす治療を受けている場合
5. その他、医師が不適当な状態と判断した場合

なお、現在、妊娠している方の場合は、接種することに注意が必要ですので、かかりつけ医とよくご相談ください。

◆予防接種を受けた後の一般的注意事項

1. 予防接種を受けた後 30 分間程度は、医療機関でお子さんの様子を観察するか、医師とすぐに連絡がとれるようにしておきましょう。急な副反応が、この間に起こることがあります。
2. 接種後、1週間は副反応の出現に注意しましょう。
3. 接種部位は清潔に保ちましょう。入浴は差し支えありませんが、接種部位をこすることはやめましょう。
4. 接種当日は、はげしい運動はさけましょう。
5. 接種後、接種部位の異常な反応や体調の変化があった場合は、速やかに医師の診察を受けましょう。その場合には、市役所当課へも連絡してください。

◆予防接種による健康被害救済制度

1. 定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく給付を受けることができます。
2. 健康被害の程度等に応じて、医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料の区分があり、法律で定められた金額が支給されます。死亡一時金、葬祭料以外については、治療が終了する又は障害が治癒する期間まで支給されます。
3. ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因(予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等)によるものなのかの因果関係を、予防接種・感染症医療・法律等、各分野の専門家からなる国の審査会にて審議し、予防接種によるものと認定された場合に給付を受けることができます。
4. 予防接種法に基づく定期接種として定められた期間を外れて接種を希望する場合、予防接種法に基づかない接種(任意接種)として取り扱われます。その接種で健康被害を受けた場合は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく救済を受けることとなりますが、予防接種法と比べて救済の対象、給付額等が異なります。

※給付申請の必要が生じた場合は、診察医、市役所当課へご相談ください。

◆接種時の保護者の同伴について

13歳以上の方へのヒトパピローマウイルス感染症の予防接種については、保護者がこの説明書の記載事項を読み、理解し、納得してお子様へ予防接種を受けさせることを希望する場合に、予診票の裏面に保護者自ら署名することによって、保護者が同伴しなくてもお子様は予防接種を受けることができるようになりました。(当日は両面の署名等の必要事項を記入した予診票を必ず持参させてください。)

○保護者の方へ：下記事項をよくお読みください。

これまで記載されている内容をよく読み、十分理解し、納得されたうえでお子様に接種することを決めてください。接種させることを決定した場合は、予診票に署名等必要事項を記載してください。(記載がなければ予防接種を受けられません)

接種を希望しない場合には、保護者自署欄に記載する必要はありません。

周 南 市 役 所
健康づくり推進課 徳山保健センター内 TEL 0834-22-8553